

# 実在の浄土と観念の浄土—キリシタン教理書に投影された近世仏教の救済論—

那須英勝 龍谷大学 文学部 真宗学科 教授

キリスト教がイエズス会士によって日本に伝来した16世紀中頃は、戦国の世が天下一統に向かう転換期にあたり、この時代に生きた人々の間では、現世に安定した社会を完成させ、世俗的・経済的成功を求めて生きようという気運が高まっていく。その流れの中で、中世に支配的であった末法史観に基づく来世主義的な仏教文化・思想に代わる、新しい時代の指導原理が模索されていた時代でもあった。しかし、この近世仏教の黎明期にあたるこの時代の仏教信仰のあり方について、当時の仏教者の立場から俯瞰的な視点をもって論じた文献はあまり存在していない。

そのような状況の中で、本発表でとりあげる「キリシタン教理書」は、当時の日本仏教を批判するためイエズス会士が著述したものである。しかしそこに記された日本の仏教に関する言説は、中世的な社会から脱皮しようとする変動する日本の文化・社会に仏教がどのように対応しようとしたのかを理解する指標として再検討する価値を有するものではないだろうか。

本発表では「キリシタン教理書」の中でも、特に、イエズス会の日本巡察使であったアレッシェンドロ・ヴァリニャーノ (Alessandro Valignano : 1539~1606) の下で1580年頃に編纂された『日本のカテキズモ』と禅僧からキリシタンに改宗した日本人イルマン不干斎巴鼻庵 (Fabian Fucan:1565~1621) が江戸時代初期の1605年に著したとされる『妙貞問答』の二書を取りあげ、そこに投影された近世仏教の救済論の特色について検討する。

日本で宣教活動を進めるイエズス会士が、日本語の教理書を著述した主たる目的は、創造主を信仰するキリシタンの教えだけが「人間の後世の霊魂の救済」を約束することを明確に説き示すことであった。しかし日本では中世以来の伝統として、末法史観に基づく来世主義的な仏教思想が広く受け入れられており、そこでは特に「阿弥陀仏の本願によって建立された浄土に死後往生する」ことを説く浄土の教えとキリシタンの教理が救済論的に競合してしまうという問題を生じさせたのである。

この問題を克服するため、イエズス会士は仏教の諸宗派で用いられる教理書をかなりの精度で解読した上で、日本の仏教は多数の宗派にわかれ様々な教理が説かれる中で、後世の救済が成立する場として「実在の浄土」が説かれるが、そこで得られる救済としての悟りは「空しい」ものである。また死後に浄土往生するといっても、それは言葉の上で説かれるだけの「観念の浄土」で、その実は「空無」に帰するのだから、仏教による後世の霊魂の救済はあり得ないと結論する。

このようなキリシタン教理書の仏教理解は、従来の研究では牽強附会の論としてあまり評価されてこなかった。しかしそこで展開される仏教批判にはやや強引なものもあるが、当時流布していた仏教典籍に基づく記述である。したがって、そこで論じられる、後世の救済の場としての浄土を相対的・二元論的な実在の浄土と説くべきか、それとも唯心論的・一元論的な観念の浄土と解釈すべきかという問題は、むしろ中世仏教の末法史観に基づく来世主義的な救済論に対して、当時の仏教内部にあった批判的言説を正確に投影したものと理解すべきではないだろうか。

キーワード： キリシタン教理書 実在の浄土 観念の浄土